

柏市小山台遺跡に見る阿玉台Ⅲ式期の東北的土器様相

西川 博 孝

1 はじめに

鬼怒川は栃木県を南流して茨城県守谷市野木崎・大木間で現利根川本流に合流するが、その合流地点のすぐ下流の右岸、下総台地をわずかに入り込んだ所に小山台遺跡は位置する（第1図）。

発掘調査は平成11年度から始まり、平成28年度まで98次にわたった調査面積は約10万㎡に達した。現在、鋭意整理を進めているが、これまでに明らかになったところでは、中心となる遺構は縄文時代中期のもので、住居跡約400軒、土坑約2000基を数えること、遺構の構築は阿玉台Ⅲ式期からはじまり、加曾利E4式期まで連綿と続いていることなどである。出土した土器も大量で、完形、半完形土器は1500個体以上と見込まれている。各時期とも好資料が多いが、集落開始期である阿玉台Ⅲ式期では土坑一括資料や単体でも興味深いものが出土している。千葉県内では、これまで当該期の一括出土例はほとんどなく、その土器組成は断片的にしか把握できていなかった。ここではその一端を紹介し、この時期における多系統の複雑な混在状況と、併せて東北からの強い影響が現在までの研究以上に確認できることを速報したいと思う。

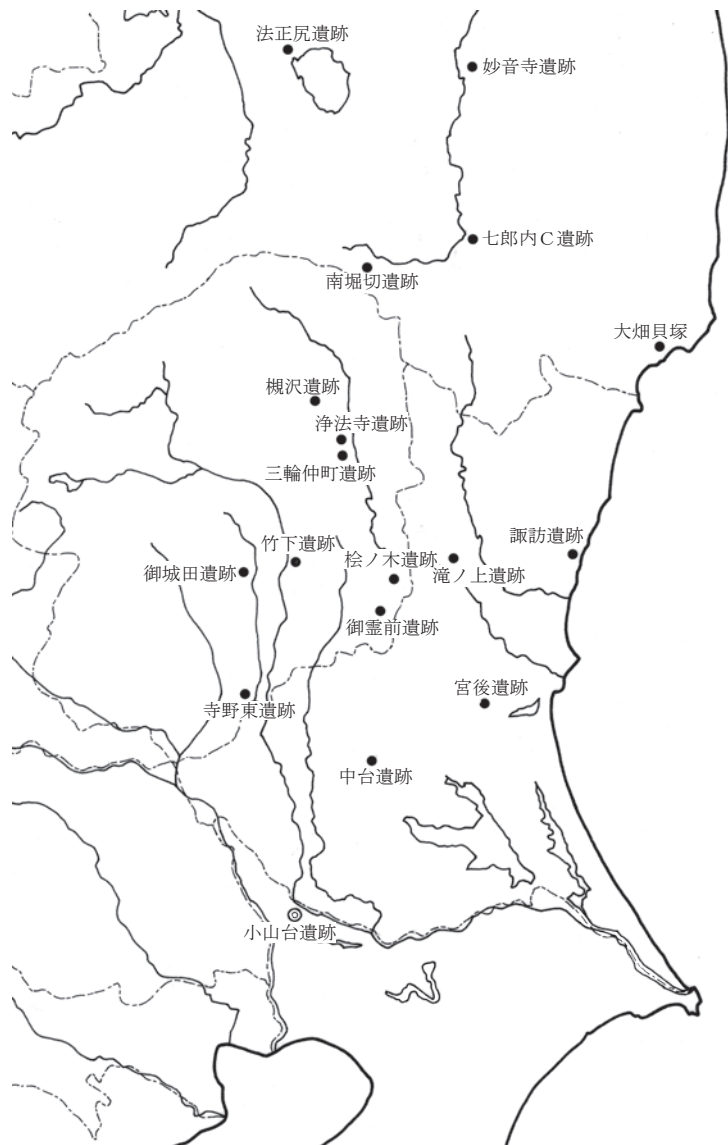
2 (36)SK136出土土器（第2図）

第36次調査SK136（以下、調査次数を括弧でくくり、これに遺構番号を付した呼称とする。）から出土した7個体の土器は、いずれも覆土中層からの出土であり、ほぼ同時期に廃棄されたものと考えられる。

1は推定最大径31.6cm、現存高24.2cmを測る胴部破片で、櫛歯条線を地文とし断面蒲鋒状の隆線が2条残り、一方は直線的に、一方は中段では一度跳ねあがってから垂下

している。さらに、隆線に沿ってペン先状の工具で押引文を施し、隆線間を同じ工具による押引文と沈線で鍵の手状や直線状に連結している。

2は口縁突起の一つを欠くほかはほぼ完存品である。口径19.3cm、器高26.5cmを測る小型深鉢である。孔が開く山形突起を2連として口縁に乗せ、肥厚した口縁



第1図 小山台遺跡と主要関連遺跡の位置

と胴部との境の直上に巡らせた隆線で口縁部文様帯とし、その中に楕円の杵状隆線を3単位間隔を開けて配している。遺存する口縁突起下に杵状文が配置され、対面の欠損した口縁突起下は杵状文から外れる配置となっているのは意図したものであろう。隆線文様以外はまったくの無文である。

3は口縁の一部を欠くほかは完存する。口径13.4cm、器高17.0cmを測る小型深鉢である。口縁端部は肥厚し、軽く膨らんだ口縁部に隆線による3単位の横S字文が巡る。口縁下及び横S字文の上縁に沿って押引文を施し、その間には小波状文が途切れながら巡っている。胴部には2条の1本引き沈線による大振りな波状文を施す。押引文、沈線共に先端が丸く尖った同一の工具を用いている。縄文はRLで、胴部は縦位回転、隆線上は横位回転施文である。

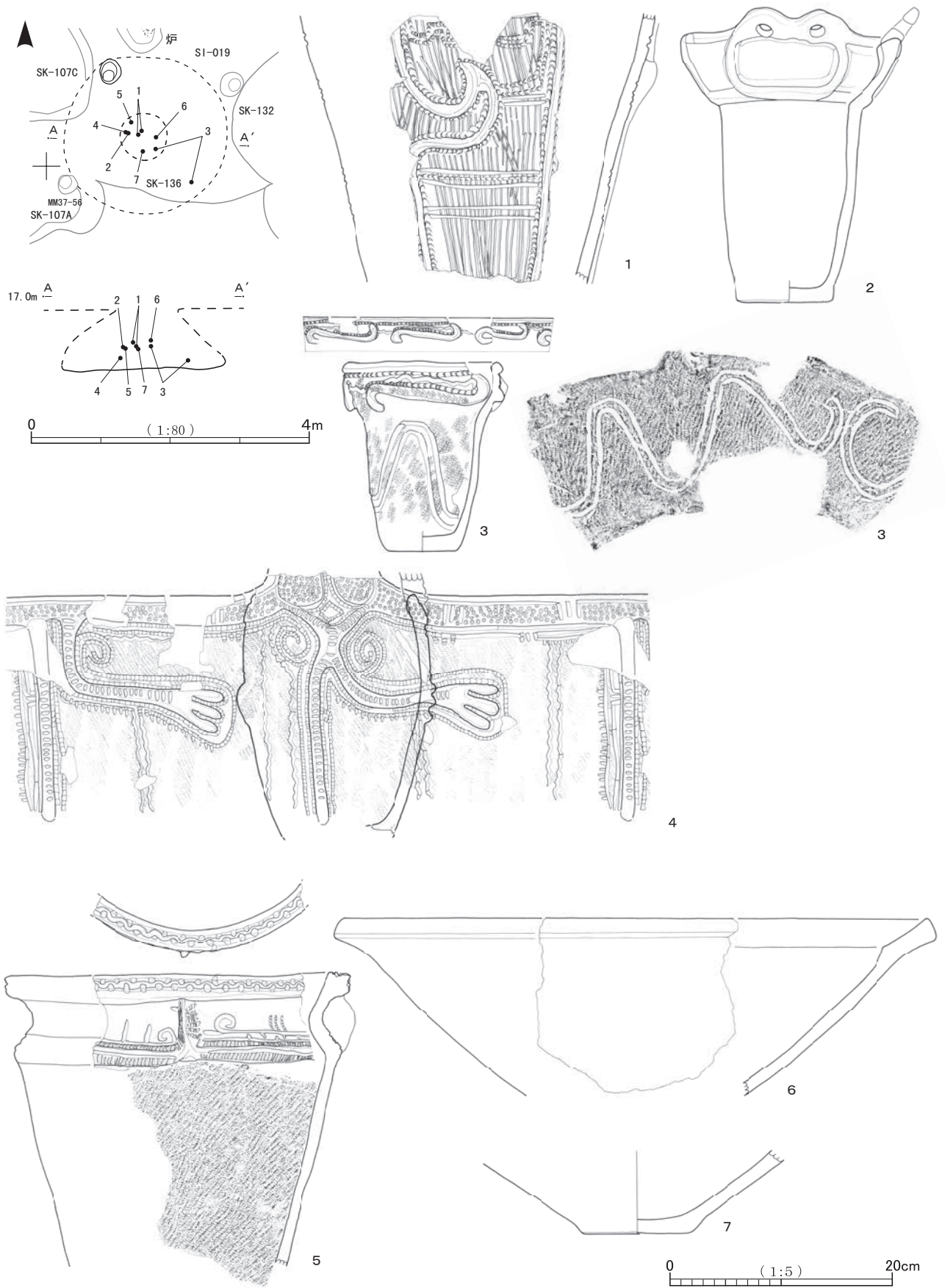
4は1個の口縁突起及び底部を欠くほかはほぼ完存する。器高22.5cm、口径14.4cmを測る小型の土器で、樽形の器形をなす。口縁部に幅2.5cmの肥厚帯を設け、正面突起下とその対面にはそれぞれ右下に向かって隆線による三つ指文を配する。口縁部の肥厚帯は上端を1条の沈線で画し、下端は2条の沈線ないしは押引文で画する。肥厚帯内は3条1単位の沈線でおそらく5分割し、中に細かい円形竹管の刺突文を充填している。ただし、突起下はこれとは独立して双弧状に画され突起へと続く。また、隆線との隙間には2条の押引文を充填している。胴部の隆線による三つ指文は突起下ではY字状の隆線と連結し、対面では直線的に垂下する隆線から離れ、独立している。隆線には2条の押引文が一部沈線となりながら沿っており、口縁部肥厚帯の下端区画に連結し、連結部下では渦巻文となる。また、この押引文には所々で3条1単位の押引文または沈線の短刻が認められる。三つ指文の腕に当たる隆線の下側及び、対面の直線的に垂下する隆線の左側には押引文とともに浅い刻み目が並ぶが、この刻み目は隆線上のものと同じである。さらに、胴部の空隙には2条1単位の小波状文が4単位垂下しているのが認められる。地文はLの無節縄文で、縦位回転である。刺突文、押引文、沈線、刻み目、小波状文の施文工具はいずれも同一の細い円形竹管と思われる。

5は口縁下が強くくびれ、肩の張った器形をなす大型破片である。推定口径30.0cm、遺存高26.2cmを測る。幅のある角形口縁の端部及び直下に交互刺突文を施す。張った肩には沈線をはさんで2列の爪形文列を施す。強くくびれた頸部はつまみ状の隆線で分割される

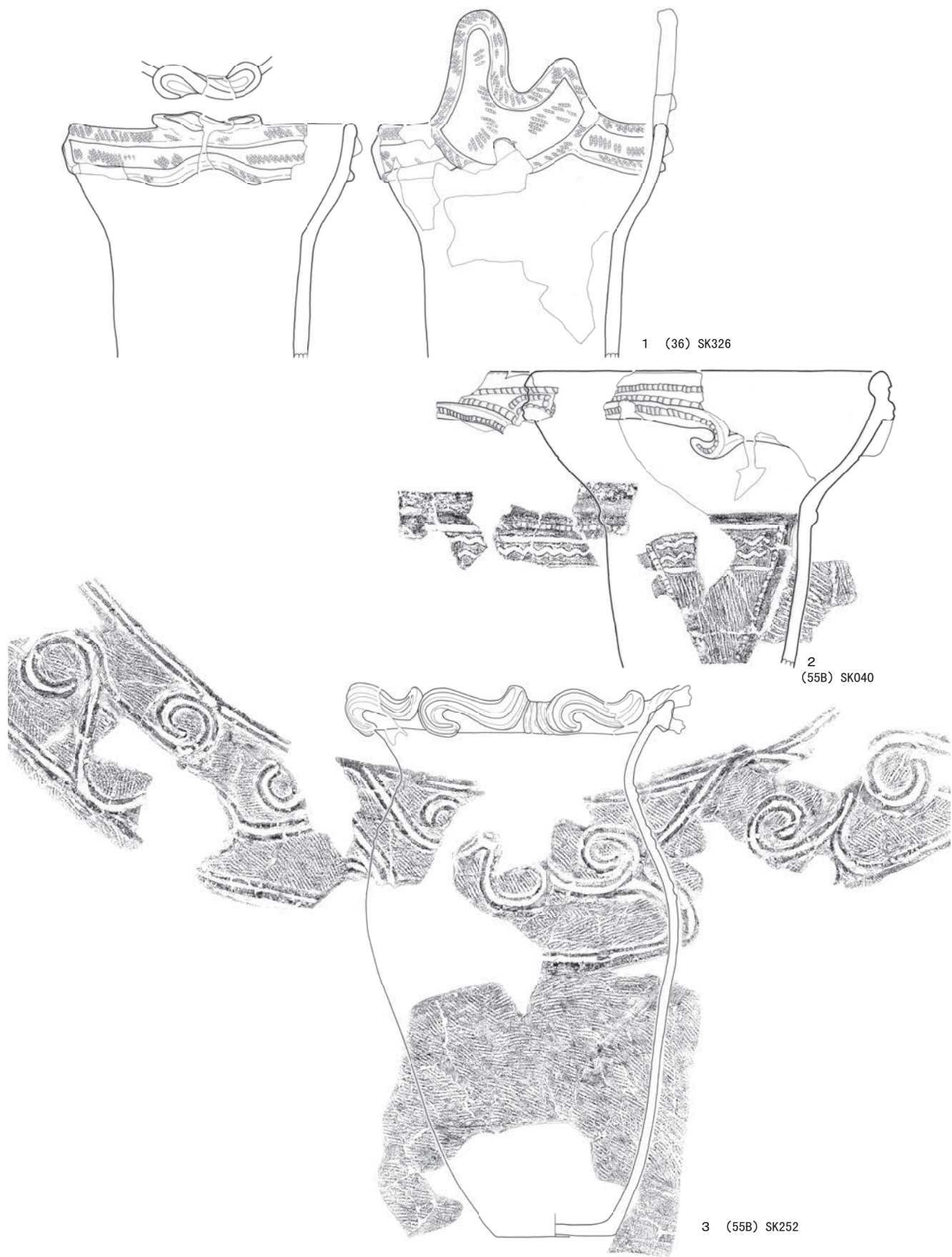
が、つまみ状の隆線の両脇は押引文を多段に施す。分割された頸部には下半にのみ文様を施す。肩の上段の爪形列に沿った1条ないしは2条の沈線の末端は小型の渦巻文となり、その先には短沈線や部分的な交互刺突紋が加えられている。また、一部には2と同様の3条1単位の押引文の短刻が付く。

6は口縁から体部にかけての破片で、推定口径52.4cmを測る大型の浅鉢である。口縁内側に稜を持つ。7も浅鉢の底部破片である。

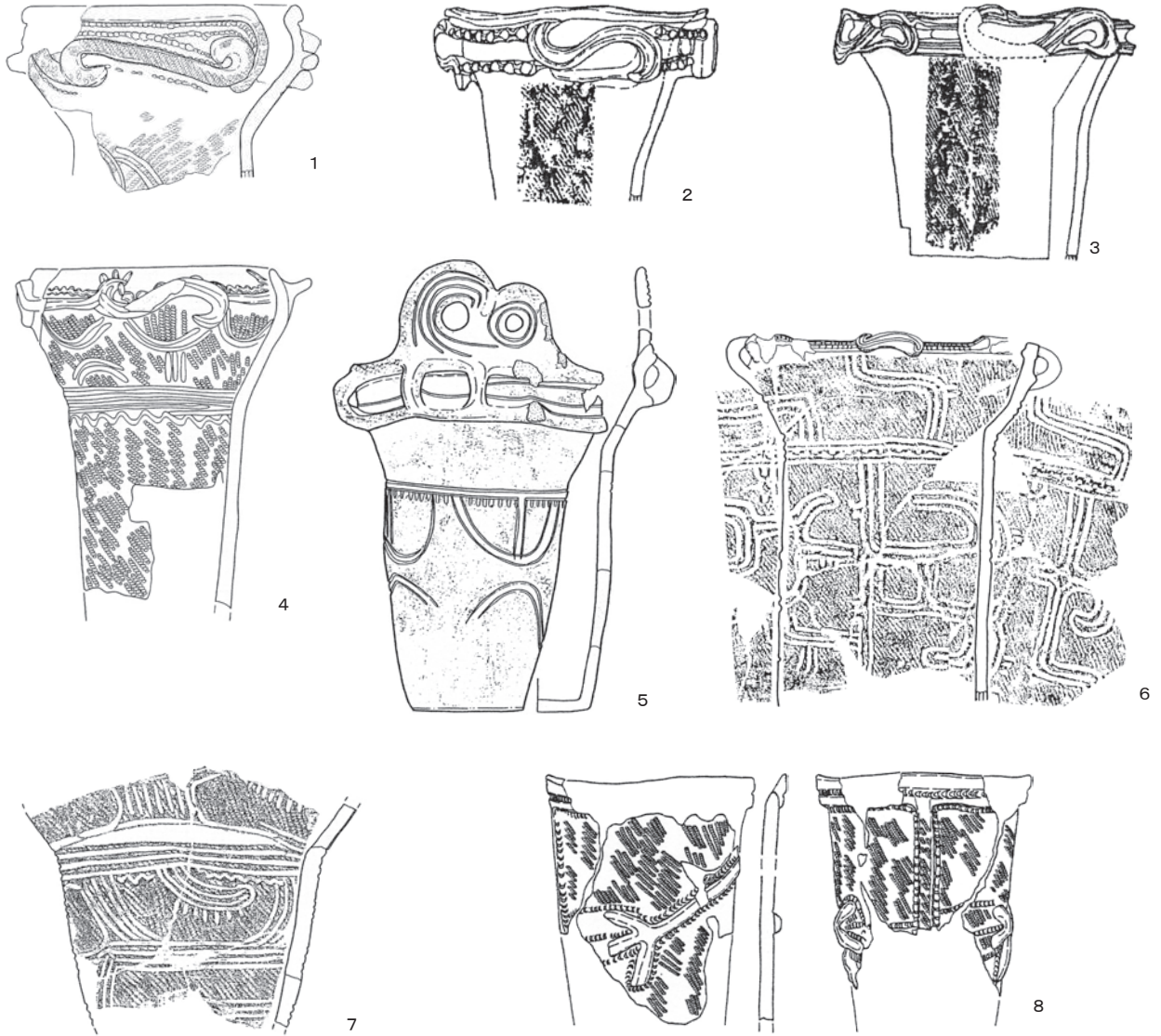
1は典型的な阿玉台Ⅲ式である。2は同時期の素文の例であろう。3は下総考古学研究会が呼ぶ中峠5次2住型深鉢¹⁾の一種で、3単位の大型横S字状文は福島県の大木式系土器の系統であることがすでに指摘されている。本例によく似た例は県内に多く認められるが、隣の大松遺跡からも出土している(第4図1)²⁾。本場の福島県から那須地方までは、この大型横S字状文は湯坂遺跡例のように上下の区画隆帯間に収まるものが多い(第4図2・3)³⁾が、関東に入ると区画隆帯は脱落し、単独の横S字文のみとなる。また、本例も大松例も阿玉台Ⅲ式特有の押引文と隆帯上に縄文が付き、阿玉台Ⅲ式と福島大木式系のキメラと解される。4は胴部に隆帯による三つ指文が勝坂式の系統であることは誰にも明らかであるが、この隆帯に沿った渦巻文を伴う押引文は福島県の七郎内Ⅱ群土器の系統であろう。一方、2条1単位で垂下する小波状文は阿玉台式の文様と考えられる。しかし、口縁部の肥厚帯はきわめて特異で、系統が分からない。肥厚帯に充填された円形竹管文は阿玉台式にも勝坂式にも稀に認められる。また、胴部の各所に見られる3条1単位の短刻はこの土器の独特の癖で、口縁部肥厚帯の分割線と同じものと解される。類例を探すと、同時期と思われるものでは栃木県三輪仲町SK280の大木式系統の土器に似た例が見られる(第4図4)⁴⁾。3条1単位の短沈線が口頸部の弧線文と口頸部と胴部の区画線を連結している。また、時期は新しいが、同県御霊前遺跡SK434の阿玉台Ⅳ式(第4図5)⁵⁾では2条1単位の短沈線が胴部の弧線文と口頸部と胴部の区画線を連結している。さらに類例を北に求めると、福島県法正尻遺跡SK552例(第4図6)⁶⁾の胴部主体文様に付属するアクセント文様に近似するものがある。したがって、やはりこの文様も東北大木式に系統が求められよう。隆線に沿う浅い刻み目列は御霊前遺跡SK434例(第4図5)や茨城県常陸大宮市滝ノ上遺跡第55号堅穴(第4図7)⁷⁾にも認められる。こうした手法はよく分から



第2図 小山台遺跡(36) SK136及び出土土器



第3図 小山台遺跡出土の大木式系統及びその要素を持つ土器 S=1/5 (1・2)、S=1/6 (3)



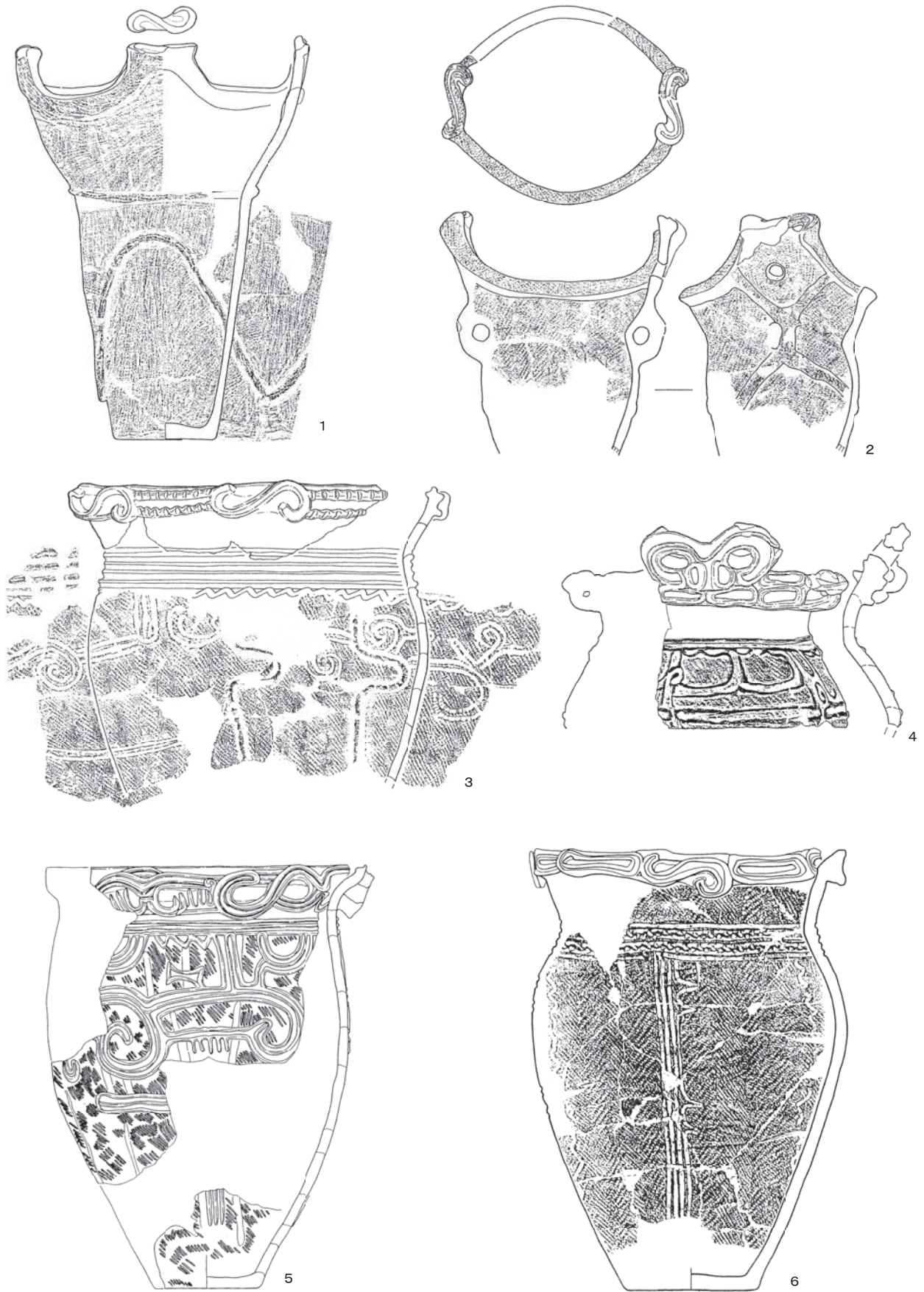
1：千葉県大松遺跡、2・3：栃木県湯坂遺跡、4：栃木県三輪仲町遺跡、5：栃木県御霊前遺跡
6：福島県法正尻遺跡、7：茨城県滝ノ上遺跡、8：栃木県竹下遺跡

第4図 参考資料 S=1/6 (1~7)、S=1/5 (8)

ないが、上記大木式系の3条1単位の短沈線に由来する北関東の在地的変容と見たい。以上のように、第2図4は小型の土器ながら、多様な系統の文様を巧みに織り交ぜた優品といえるであろう。なお、三つ指文と七郎内Ⅱ群土器の押引文と取り合わせは、栃木県竹下遺跡SK129に類例がある(第4図8)⁸⁾が、本例より全体の文様がずっと簡素である。5は口縁下が強くくびれた器形が特徴で、その系統がまず問題である。口縁下にくびれを持つのはこの時期の大木式にもあるがその多くは橋状突起を伴っており、本例のようなつまみ状の区画はない。口縁端部及びその直下の交互刺突

文、肩部の上下の刻みに挟まれた沈線とその上に沿って展開する小型渦巻文を伴う文様は勝坂式であろう。また、胴部の縄文は縦位の縞状に施文されており、これは大木式の特徴である。なお、本例にも2と同様の3条1単位の短刻が付く。したがって、本例も不明な部分もあるが多様な系統を含んだ土器と考えられよう。

以上、(36)SK136から一括出土した土器には、勝坂式の影響とともに大木式からの影響も強く認められるのであるが、重要なのはこれらの文様系統が小山台遺跡において十分に認識され、1個体の土器の中に融合された状態で表現しているという点である。



1・2：千葉県飯積原山遺跡、3：栃木県御霊前遺跡、4：茨城県滝ノ上遺跡、5：栃木県御城田遺跡、6：福島県法正尻遺跡

第5図 参考資料 S=1/6 (1~4・8)、S=1/8 (5)

3 その他の東北系土器 (第3図)

次に、そのほかに阿玉台Ⅲ式期の東北系及びその影響が認められる土器のいくつかを紹介しておきたい。第3図1～3はいずれも大木式系統の横S字文を施すものである。

1は(36)SK326から出土した。口縁部に隆線とRLの縄文のみを施した阿玉台式の半粗製土器である。口径25.6cm、現存高32.0cmを測る。異なる形態の口縁突起が対向しており、一方は左右非対称の二尖の突起で、もう一方は幅広の低い突起の上端が横S字文となっている。この個体のみでは時期判定が難しいが、阿玉台Ⅲ式の完形土器1個体、同式の大型破片1個体が伴っており、同じ時期のものともみて問題ないと考えられる。これと同様の横S字文が乗る口縁突起を持つ例は酒々井町飯積原山遺跡(78)SK569(第5図1)や同(78)SK1046(第5図2)⁹⁾がある。

第3図2は(55B)SK040から出土した。完形品ではないがほぼ全容がわかる資料である。推定口径32.0cm、現存高27.3cmを測る。平縁で、口縁下に太い隆線による数単位の横S字文とこれを連結する直線文を配し、隆線上、隆線の上側の裾及び口縁直下に先端が丸みを帯びた工具による押引文を施す。頸部は無文で、胴部との境を隆線で画している。胴部は断面蒲鉾状の隆線で大きく鋸歯状に区画し、その中に隆線に沿った押引文や同一工具による直線文、小波状文及び条線を施す。その胴部文様は明らかに阿玉台Ⅲ式で、口縁部文様は(36)SK136の第1図3と同様に阿玉台系統と大木式系統のキメラである。(36)SK136の3のような中峠5次2住型深鉢の一種や前掲第3図1のような阿玉台式の器形に横S字文が乗る口縁突起を持つ例は、これまでかなり出土していて阿玉台式と大木式系統の同時性を示す証拠として指摘されてきたが、本例は口縁部の横S字文と胴部の阿玉台Ⅲ式文様が同一個体上に配置されており、正しく阿玉台Ⅲ式と大木式系統の同時性を直接示す重要な資料であろう。

第3図3は(55B)SK252から出土した。口径35.0cm、器高61.2cmの大型土器である。口縁直下に2本の沈線による背割れ隆帯で大振りの横S字文を9単位巡らせ、無文の頸部を挟んで胴上半に2条の平行する低い隆線で絡み合った渦巻文を施す。縄文は撚りの緩いLRで、胴上半では隆線間を充填し、胴下半は縦位回転で施文する。本例はほとんど大木式系統そのものと言える土器であろう。類例を求めると、阿玉台Ⅲ式期の御霊前遺跡SK47(第5図3)⁵⁾や阿玉台Ⅳ式期の御城田遺跡

SK662(第5図5)¹⁰⁾、滝ノ上遺跡SK495(第5図4)¹¹⁾は器形、文様構成は基本的に同類と言えよう。福島県の例では器形、口縁部文様は法正尻遺跡SK552(第5図6)に近い。本例は阿玉台式の伴出土器がないが、下総考古学研究会による勝坂Ⅴ式¹²⁾が伴出しており、これまで紹介してきた一群の土器より後出のものと思われる。標題から外れるが、これも貴重な資料と思われる故、取り上げた次第である。

以上、小山台遺跡から出土した大木式系の代表的な土器を紹介した。無論、これらはそのごく一部にすぎない。阿玉台Ⅱ式期にはほとんど東北の影響が認められないにもかかわらず、当該期には下総考古学研究会による研究¹³⁾以上に東北方面からの相当強い影響があったことがこれで理解できるであろう。

4 結語

当該期は東関東では阿玉台式が勝坂式の影響を受けて幅広の爪形文や隆線の発達があったとされる¹⁴⁾。一方、福島では法正尻遺跡の土器群を見る限り、五領ケ台2式、竹ノ下式、阿玉台式の影響を受けて成立した七郎内Ⅱ群土器系統をはじめとする在地化した土器から、より仙台湾方面の真正大木式に近くなって口縁部紋様の大型化、立体化が急激に進み、新潟方面からも火炎系土器が流入して、過飾化が頂点に達するという大まかな流れが汲み取れる。各地で阿玉台式、勝坂式、大木式系統¹⁵⁾のキメラが多く認められたり、他系統の土器が数多く出土し影響を及ぼし合うのは、こうした過剰装飾の気運が当該期前後から各地で高まった結果なのであろう¹⁶⁾。

注

- 1) 下総考古学研究会 2006「〈特集〉千葉県松戸市中峠遺跡第5次調査の成果」『下総考古学』19
- 2) (財)千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4-柏市大松遺跡-縄文時代以降編1』
- 3) 海老原郁雄 1980「加曾利EⅠ式の変遷について」『なわ』18号
- 4) (財)栃木県文化振興事業団 1994『三輪仲町遺跡』
- 5) (財)栃木県文化振興事業団 2000『御霊前遺跡Ⅰ』
- 6) (財)福島県文化センター 1991『東北横断自動車道遺跡調査報告11 法正尻遺跡』
- 7) 常陸大宮市教育委員会 2016『滝ノ上遺跡Ⅳ』
- 8) 宇都宮市教育委員会 1989『竹下遺跡Ⅱ』
- 9) (公財)千葉県教育振興財団 2015『酒々井町飯積原山遺跡4』
- 10) (財)栃木県文化振興事業団 1987『御城田遺跡』

- 11) 常陸大宮市教育委員会 2016『滝ノ上遺跡Ⅲ』
- 12) 下総考古学研究会 2004「〈特集〉房総半島における勝坂式土器の研究」『下総考古学』18
- 13) 下総考古学研究会 2011「〈特集〉房総半島および周辺地域における大木式諸型式(7b式～8b式)の研究」『下総考古学』22
- 14) 西村正衛 1984『石器時代における利根川下流域の研究』
- 15) これまで阿玉台Ⅲ式に併行する福島県の土器に対して「大木式系」として、型式名での呼称を意識的に避けてきた。これには、以下のような理由がある。

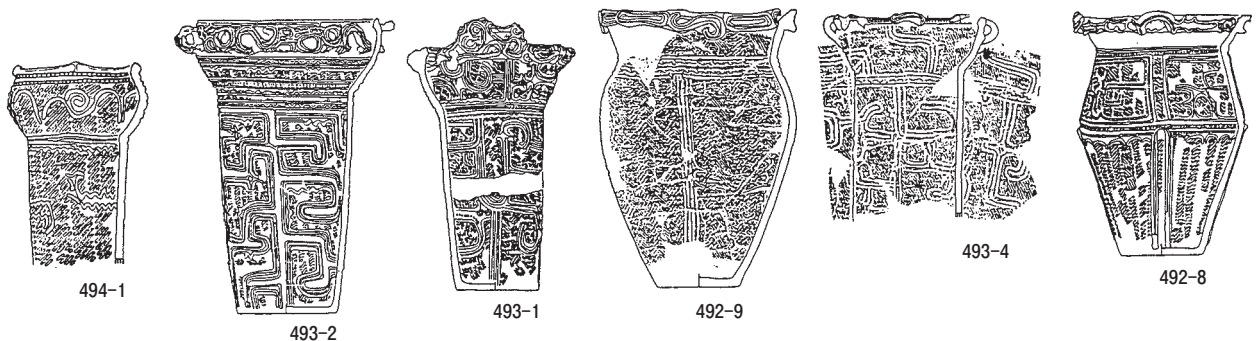
阿玉台Ⅲ式に併行する福島の大木式系土器は、本論で紹介した事例等から大振りの横S字文を施す土器であると考えられる。法正尻遺跡の編年案を参考とすれば、横S字文はⅡ群4類(1)の段階に小型のものが見られ、Ⅲ群1類(1)の段階に大型化するという。したがって、阿玉台Ⅲ式に併行する大木式系土器は法正尻遺跡Ⅲ群1類(1)^{*1)}と考えられる。ただし、法正尻編年は子細に検討してみるとかなり強引な印象を受ける。Ⅲ群の1類(1)から(3)の分類は大まかな点では首肯されるが、細部に疑問な点が多々ある。たとえば、付図5でⅢ群1類(1)に分類されたSK420出土の478-7、478-8、SK579出土の499-1はより新しい(2)とみてもおかしくない。したがって、Ⅲ群1類(1)段階は厳密にSK552出土土器を標識資料とするのが至当と思われる。ただし、493-3はより後出で、標識資料からは外しておきたい(第6図)。なお、Ⅱ群4類(1)の段階とⅢ群1類(1)の段階には飛躍が認められるが、南堀切遺跡5号住居址出土土器^{*2)}を間に挟めば、スムーズな変遷となろう^{*3)}。

問題はその呼称である。当該期研究の先駆者である馬目順一氏は大畑貝塚の報告^{*4)}で『大木8a式期の古い時期には、阿玉台式の土器が共存するのである。しかし、意匠的には、大木8a式土器よりも確かに古いものであろう。台の上貝塚第1類a種に当たる。』とされた。台の上貝塚第1類a種^{*5)}とは報告書の図版を見る限り、阿玉台Ⅲ式である。したがって、馬目氏は阿玉台式の一部にまで大木8a式を遡らせたことになる。以来、福島・栃木の大部分の研究者はⅢ群1類(1)段階及び後続土器にためらわず大木8a式の名称を与えている^{*6)}^{*7)}。

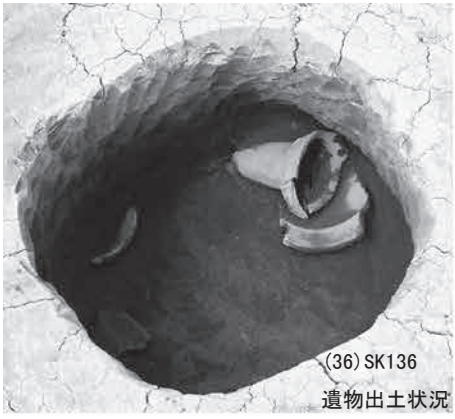
しかし、大木8式は山内編年では、加曾利E式前半併行に当てられ、山内標識資料そのものの大木8a式は加曾利E1式新段階に相当すると思われる。

塚本師也氏は渡辺龍瑞氏が1957年宇都宮大学の「史友」誌上で栃木県湯坂遺跡のT1-V区土坑の一括土器を「大木8式に似たもの」と呼び、1963年の日本考古学年報の調査概要報告では「大木7b式の新型式比定土器」と呼んだことを紹介し、阿玉台式後半に伴出するこれらの土器は『仙台湾周辺で型式設定された大木7b式や大木8a式とは異なる土器である』と指摘している^{*7)}。この渡辺氏の「大木8式に似たもの」、「大木7b式の新型式比定土器」の呼び方は、正直な呼び方であろう。塚本氏が指摘するように土器文様から見れば、8式に近く、伴出する阿玉台式土器からみれば、山内博士の定義から7b式と呼ばざるを得ない。しかし、仙台湾の山内標識資料からはとても7b式とは呼べないのである。この理由から塚本氏本人は「阿玉台Ⅲ・Ⅳ式併行の大木式系土器」と呼んでいる^{*8)}。塚本氏の指摘は至極尤もである。しかし、この呼称では編年表に記載するには不都合であろう。筆者は当面、法正尻Ⅲ群1類(1)段階すなわちSK552出土土器を仙台湾との地域差を意識した上で、大木8a直前式と呼ぶこととし、後続する阿玉台Ⅳ式・勝坂式末期・中峠式・加曾利E1式古段階の諸関係を考える上での定点の一つとしたい。

- *1 注6文献と同じ
 - *2 白河市教育委員会 1984『南堀切Ⅳ』
 - *3 塚本師也 1997「考察 中期縄文土器について」『浄法寺遺跡』
 - *4 いわき市教育委員会 1979『大畑貝塚』
 - *5 いわき市教育委員会 1968『小名浜』
 - *6 たとえば、福島県では下記文献など
 - 中野幸大 2009「福島県の大木8a式土器(前編)」『福島考古』50号
 - 中野幸大 2011「福島県の大木8a式土器(後編)」『福島考古』52号
 - *7 栃木県では別の学史があることを塚本師也氏が子細に述べておられる。*3の文献に同じ
 - *8 塚本師也 2003「茨城県北部域に於ける縄文時代中期中葉の土器の一樣相」『領域の研究-阿久津久先生還暦記念論集-』
- 16) 土肥 孝 2007「縄文土器 中期」『日本の美術』



第6図 法正尻遺跡SK552出土の大木8a直前式一括資料



(36) SK136
遺物出土状況



(36) SK136-4a



(36) SK326



(36) SK136-1



(36) SK136-4b



(55B) SK040



(36) SK136-2



(36) SK136-5



(36) SK136-3



(55B) SK252

柏市小山台遺跡(36) SK136及び出土土器